

違いを認め合う夫婦に

上 廣 哲 治

自分ではそうとは思わないのに、父親や母親にそっくりだと言われることがあります。顔付きだけではありません。しゃべり方からしぐさ、暮らしの中での行動まで似ていると言われるのです（私の場合には、幸か不幸か父親と瓜二つだとよく言われるのですが……）。

顔や体型が似ていると言われれば、遺伝的なもので当然だと思のですが、物事のやり方やしぐさなどが似てくるのは、知らず知らずのうちにその人の影響を受けているからなのでしょう。

「似たもの夫婦」という言葉があるように、世の中には見るからにそっくりな夫婦もいます。端から似ている人たちが、好意を寄せ合って一緒になることもあれば、中には時を経て、だんだん似てくる場合もあります。後者の場合、生活を共にする中で、お互いのしぐさや行動、言葉遣いなどが自然に同調していくのだと思われれます。そうなると、顔付きまでそっくりになることがあります。

とはいえ、夫婦がよい具合に同調するのはなかなか難しいものです。それぞれ異なる家庭で育った二人ですから、幼い頃から染みついた習慣や性癖のようなものは、簡単に変えられるものではありません。

ん。結婚して初めて習慣の違いに驚き、「犬も食わない」夫婦喧嘩に発展することもあるようです。

身近な例を挙げれば、お正月の雑煮の違いから「溝」が生じた夫婦がいます。雑煮は、餅の形や味つけ、中に入れる具の種類まで、地域によっても家庭によっても千差万別です。新潟県沿海沿いの町にある知人の家の雑煮は、醤油のすまし汁に四角い焼き餅を入れたもので、ごぼうや大根、こんにゃく、鮭など、たくさんの具を加えるといえます。一方、お連れ合いの出身地である福井県の雑煮は、具のない味噌汁に茹でた丸餅を入れ、鰹節をかけただけのシンプルなのが主流です。知人いわく、彼女の実家で初めてその雑煮を出されたとき、「ああ、おれは歓迎されていない」と真剣に悩んだそうです。

普段の食事の場面でも、おしゃべり厳禁で静かに食べる家もあれば、いろいろな話をしながら一家団欒の場にする家もあります。朝は和食でなければという家もあれば、いやいやパン食がいいという家もあるでしょう。国際結婚ともなれば、習慣の違いはさらに大きくなります。

似顔絵で知られる漫画家の山藤章二さんは、生後わずか四か月でお父さんを亡くしました。それから、お母さんがひとりで四人の子どもを育てあげ、特に山藤さんのことを、お父さんの生まれ変わりのような思いで大切にしてくれたといえます。二人の姉もそれを見習い、山藤さんが少しでも熱を出したり咳をすれば、おんな全員で看病する騒ぎになるのです。それは成人しても変わらず、のちに妻となる女性はその「異常な光景」を見て驚き、「こんな過保護な男と結婚するのかと、一抹の不安を抱いた」そうです（『文藝春秋SPECIAL』平成二十四年季刊春号）。

一方、妻のほうは、対照的な家庭で育ちました。お父さんは叩き上げの表具師で、いつも何人かの職人や見習いの若者がいるという環境。「親方の内儀」であるお母さんはいえ、職人が怪我をしても、

「二升瓶の焼酎を口に含んでプツと吹きかけ治療はおしまい」（同前）というタイプです。そういう家で育った人ですから、自分のことは自分でするのが基本で、熱が出ようが咳をしようが誰もかまってくれない。山藤家で見えた光景に大いなる違和感を持ったのも当然でしょう。

それほど家風の違う男女が一緒になることについて、山藤さんは次のように記しています。

「結婚とは、家風と家風の合流である。／＼どちらの家風がイニシヤティブをとるか。一方が一方に沿うのか、折り合うのか、それともせめぎ合うのか。いずれにしろふたりで新しい家風を創造しなくてはならない大事業である」（同前）

山藤さんの場合は、妻側の家風が「男の顔を立てろ」という古風なものだったのが「幸運」だったといえます。会社員を辞めてフリーとなったあと、しばらく家計を支えたのは妻のお金。しかも彼女は、一度も夫の尻を叩いたり愚痴を言ったりせず、夫は甘えてその家風に身を任せたというのです。山藤さんはそれを、チグリス川とユーフラテス川の合流によって古代文明が誕生したことにとたとえています。もちろん、この合流のあり方は普遍的なものではなく、一つの例に過ぎません。山藤さんが言うように、合流にはさまざまな可能性があるのです。異なる色彩が溶け合っていくような「同調」型もあれば、性格の違う二本の糸で一枚の布を織り上げていくようなタイプがあってもいい。問題なのは、相手の癖や習慣を否定し、なんでも自分の「色」に染め上げようとする態度です。

人は、無意識のうちに身につけた癖や習慣に固執し、ほかの選択肢があることを無視してしまいがちです。それは自らの器を小さくするだけでなく、ときには他者を圧迫して「いざこざ」の原因をつくってしまいます。そうならないためにも、さまざまな固執やしがらみから自らを解放し、軽やかに気持ち

ちを転換する姿勢が大切になります。「似たもの夫婦」である必要はないけれど、相手の「色」を認める努力は、けっして怠らないようにしたいものです。

精神科医の宮地尚子さんは、『ははがうまれる』という著書の中で、その日にあった「よかったこと」を三つメモする「いいこと日記」を続けていと記しています。悪かったことはあえて書かないということですから、「朝の誓」にある「人の悪をいわず」や「不足の思いをいたしません」にも通じるような「実践」です。宮地さんはこの日記をつけることで、「いいことはたくさん起きているのに、それらを当たり前のように受けとめて、じゅうぶん味わっていないかった」こと、「うまくいかなかった出来事のようにばかり注意を向けていた」ことに気がきます。

世の中にはひどいこと、腹が立つことがたくさんあります。だから最初は、そういったことから目をそらしているのではないかという罪悪感を感じることもあったといえます。しかし、「おそらくそうではない」と思うようになった宮地さんは、こう記しています。

「悪いことはもちろん起きていくけれど、よいこと、楽しいこと、うれしいことも世の中にはたくさんあって、それを感じる能力をきちんと取り戻したほうがいいということなのだと思う。そして、感じられるようになったら、それが楽しみや喜びを他者に与えるきっかけにもなる」

夫婦の間にも、不満の種は少なからず存在するものです。自分とは異なる習慣や考え方に触れたとき、否定的な態度をとってしまうこともあるでしょう。しかし、それは関係を好転させることにはなりません。不満なことにはばかり注意を向けるのではなく、たくさんあるはずの「いいこと」を感じ取る姿勢、相手との違いをプラスにとらえる姿勢こそが、愛和に満ちた夫婦関係への近道になるのです。